

桜蔭俳話会 七月句会 (第三二七回)

平成二十六年七月二十七日 (日)

会場・旭区民文化センター (サンハート)

弁明の舌の真つ赤よかき氷

守

【自句自解】

真つ赤な嘘をつく舌先と、いちごシロップをたっぷりかけた掻き氷との付き合わせの一句である。かき氷の赤に染まった舌先に出た男の子の弁明は、嘘とすぐ分かる程度のいい加減なものである。それでも、女の子は嘘と知りながら、うんうんと頷いている。二人の間の諍いは元々大したものではなかったのである。

胃薬の舌に残りぬ梅雨の雷

秀一

【鑑賞】

薬も近頃は服用しやすいようにカプセル入りのものが多く、粉末状の薬剤や粒状の薬剤はあまり見かけないが、この句では薬が舌に残っているという。薬のざら付き感を梅雨の雷と付き合わせたものであるから、その感じを最も良く出すのは、粉末状の薬剤や粒状の薬剤なのであろう。

電車待つホームの扇子持ち替へぬ

秀一

【鑑賞】

日常生活の何気ない所作に俳句の題材を得たものである。「電車待つホームの扇子」としたことによって、暑いホームで気休めに扇子を使い、冷房の効いた涼しい車内を思い浮かべながら、電車の到着をじりじりと待っている作者の気持ちがよく感じ取れる。

大夕立ジョギング姿勢保ちけり

秀一

【鑑賞】

突然の大夕立に遭遇したジョギングの人が雨宿りをしている。これだけでは一句にならない。そのジョッガーが、両手を振ったり足踏みを続けて、ジョギングの姿勢を崩していないことに気が付いたことよって、一句が成立した。

蝉生る一声ありて日の暮れし

ツル子

【鑑賞】

蝉が生まれ、翅が乾いて飛び去るとき、ひと声啼いたのであるうか。そのとき時刻は日暮れへと移っていた。「蝉生る」を「初蝉」としてもよい。

恋人と言ふ程でなしかき氷

守

【自句自解】

テニス部の練習帰りに高校生四人が立ち寄った氷水屋では、一つのテーブルに椅子が二つしかなかった。やむなく四人は男女二人ずつに分かれて座ったが、公然とした恋人同士という訳ではなかった。

でも、このような分かれ方をみると、男の子と女の子のどちらか一方には、秘めたる思いがあったのかも知れない。男子二人、女子二人に分かれて座っても良かったのだから。

十薬をずらり干したり元氣婆

ヤエ子

【鑑賞】

十薬はその名の示すように沢山の薬効が古くから言い伝えられている。摘み取った十薬は干にして保存する。矍鑠として十薬の日干し作業に勤しんでいる老年女性の姿が目につかんで来る。

ただし、「元気婆」は日本語表記として未成熟ではないか。「婆元気」とすると良い。

堂堂と色褪せはじめ七変化

才美

【鑑賞】

ある老優が最後の舞台を演じ切って舞台を退こうとするとき、観客の脳裡にはその老優の演じたこれまでの名舞台が走馬灯のように過る。老優の堂々とした引退シーンである。作者の眼前にある紫陽花は、さぞや立派な花を咲かせ、色の移り具合も素晴らしかったのであろう。「堂々」という形容を付けるのに相応しい程に。

見送りし子の忘れ物夜の秋

弘子

【鑑賞】

久方に話し込んで子が帰って行った。ふと見ればその子の忘れ物を見付けた。「夜の秋」の措辞が話し込んだ時間の長さを彷彿とさせる。

風鈴の伊万里焼なりフェリー来る

明美

【鑑賞】

フェリーの到着を待っている船着き場の風鈴は、伊万里焼製であった。作者がこれから訪れる地である。

風鈴のそよりともせず暮れかかる

弘子

【鑑賞】

暮れかかる風鈴かぜの来ぬ日かな

緑雨なり拭ふべきもの何もなし

才美

【鑑賞】

精神性の高い一句である。物理的に雨に濡れた体や衣服を拭う物がない、と即物的に言っているのではない。素の心の自分になって、雨にこのまま濡れて行こうという心持ちなのであるうか。

廻るはなしとだえず遠花火

秀一

【鑑賞】

話題を次々と廻らせていく二人の話は尽きない。話の途中や合間に遠花火の音が、話の緒を繋ぐように低く響いてくる。その二人は久し振りに会った旧友なのであるうか、長年連れ添った夫婦なのであるうか。

校正の一字気になる熱帯夜

守

【自句自解】

寝苦しい熱帯夜である。寝返りを打っているうちに、校正したゲラ刷りの原稿が脳裡をかすめる。その校正の一字を気にすればするほど、ますます眠れなくなる。

白南風や青一色のワンピース

才美

【鑑賞】

白と青との色の対比の清々しい一句である。

約の日の待ち合ふ友の白緋

ツル子

【鑑賞】

約束の待ち合わせ日、友人は清楚な白緋に身を包んで現れた。白緋と置くことによって、その友人関係が心地良いものと、思い浮かばれる。

隣家よりサンバのリズム熱帯夜 明美

【鑑賞】

熱帯夜であれば、隣家から洩れ来るリズムはまさにサンバのリズムであろう。

くま笹の揺れるにまかす蝸牛 友子

【鑑賞】

熊笹の葉先に取り付いている蝸牛の情景がよく見える。蝸牛は熊笹の揺れる方向にゆれるのみである。

空映し泳ぐ目高や瀬戸火鉢 幸

【鑑賞】

水を張った古火鉢に目高を飼っており、その水面に空が映っている。水の張られた火鉢が空を映しているという静止画像的に詠むのも良いが、折角、火鉢の水に目高が泳いでいることを発見したのであるから、これを眼目に据えて動的画像にして読み取った方が面白い。例えば、次のように。

【添削】 雲割って進む目高や瀬戸火鉢

引き波とたはむる足うら八月尽 才美

【鑑賞】

漢字で表記すれば、「引き波に戯る蹠八月尽」となるが、中七を「たはむる足うら」とすることによって、夏の終わりの波打ち際に遊び興じている子供の姿がよく見えてくる。また、中七と下五の間の切れが、視覚的にもよく出て来る。「足うら」又は「蹠」は、俳句の世界では誤用か強引かは知らないが、昔から「あうら」と読む。「足裏」の事であるが、足裏は日焼けした背中などの部位に比べて際立って白い。

急ぐ足太字にゆれる氷水

ツル子

【鑑賞】

最初に一読したときには「太字」の意味が分からなかった。再読したとき、氷水の旗であると、はたと気づいた。急ぐ用事の途中であるが、氷水の太字に魅かれて、ちよつと寄っていかうかとの作者の気持ち、足がゆれる、ということによって出ている。中七と下五の間に明確な切れを置いて、次のようにすることもできる。

【添削】

急く足のゆれし太字や氷水

大夕焼元零戦のパイロット

守

【自句自解】

ある零戦のパイロットは今もプロペラ機のパイロットとして、航空測量などの現場で活躍している。この伝説の操縦士とも言える人は、ある仕事の帰路、大夕焼けに出会った。その脳裡には、戦場の空に散って行った戦友の顔が浮かんだ。

蔓引けば踏ん張り返す草の意地

幸

【添削】

蔓引けば草の踏ん張り草の意地

薔薇真紅絵筆一氣に進むなり

ヤエ子

【添削】

薔薇真紅絵筆一氣に走りけり

色褪せた紫陽花咲けり我庭に

眞壽

【添削】

色褪せし大紫陽花や吾が狭庭

涼しさやドミノ倒しのた走れる

才美

【添削】

た走れるドミノ倒しや夜の秋

涼風の時に入り来る厨窓

弘子

【添削】

涼風のときたま入り厨窓

戦つて勝利を得た巴里祭

直子

【添削】

戦ひの何時もどこかで巴里祭

病葉や少女の消ゆる田舎道

明美

【添削】

病葉や少女の消ゆる白き道

ブルーベリーころころともぐ夏深し ヤエ子

【鑑賞】

【鑑賞】

良く熟したブルーベリーの実は、もごうとすると枝からぼろぼろ落ちるといふ。これに「ころころ」といふ擬態語を振り当てたのが面白い。

ただし、下五に「夏深し」と置いたのは無難な詠み方であるが、ブルーベリーのある地上から空へ場面転換して、例えば「雲の峰」としても良い。

【添削】 ブルーベリーもぐやころころ雲の峰

「と」を使わないと、句にリズムが生まれる。

散歩中の犬腹這へる片かげり

友子

【添削】

散歩犬ついと入りけり片かげり

梅干しの濃き色染まるにぎり飯

弘子

【添削】

梅干しの色の指跡にぎり飯

空へ向き何を語るか凌霄花

ヤエ子

【添削】

空へ向き何か語りし凌霄花

静もりし森のひぐらし道の駅

弘子

【添削】

鎮もりし森のひぐらし道の駅

涼しさや豊かな白い浜木綿香

直子

【添削】

涼しさや浜に白花赤い花

草引きて蚊の襲来に我を打つ

ツル子

【添削】

蚊のいのち打つ手我を打ちにけり

食ひ初めの児の口元へ夏料理

友子

【添削】

寝起きたる食ひ初めの児や夏料理

土用鰻三島の水の清らかさ

ヤエ子

【添削】

土用鰻水の奔りし三島宿

ゴーヤ味噌苦さが癖になる夏の日 直子

【添削】

いつしかと癖になりたるゴーヤ味噌

ゴーヤは苦瓜のこと、季語としては秋。

福島の農家の名あり桃熟るる 友子

【添削】

福島の農家の名あり箱の桃

夕食後家族で食べる枇杷ひとつ 眞壽

【添削】

語らひの家族に枇杷の一つづつ

(不在投句 古野明美、恩田才美、荒木ツル子)

「事務局からお知らせ」

○第一一四回通信句会作品募集

夏に属する季語を用いた三句。締切りは、八月十日(日)。同封の葉書でお送りください。

○八月の句会は休みです。

○九月の句会

・日時 九月二十八日(日)午後一時から

・会場 旭区区民文化センター・サンハート

(相鉄線二俣川駅ライフ五階)

◎展示作品の提出について

通信句会の外部選者をお願いしてあります飯村寿美子先生が会長をしておられる、旭区内の俳句グループの集合体では、今秋に俳句作品の展示会を開催します。

桜蔭俳話会もこの会の趣旨に賛同して参加することになりました。一人一句で作品を短冊に筆書きし、短冊掛けに収めて出品します。短冊自体の出品はまだ先の事になります。が、会場にて配布する葉の出品リスト欄に、俳句と作者名を載せます。この葉の印刷原稿は九月初めに確定したいとの事ですので、八月二十五日までに、担当幹事の藤本友子さんのところまで、郵便葉書またはメールで出品の一句をお寄せ下さい。